

二〇〇九年 第41回日展 借老



166×91

第41回日展アートガイド掲載の私の解説

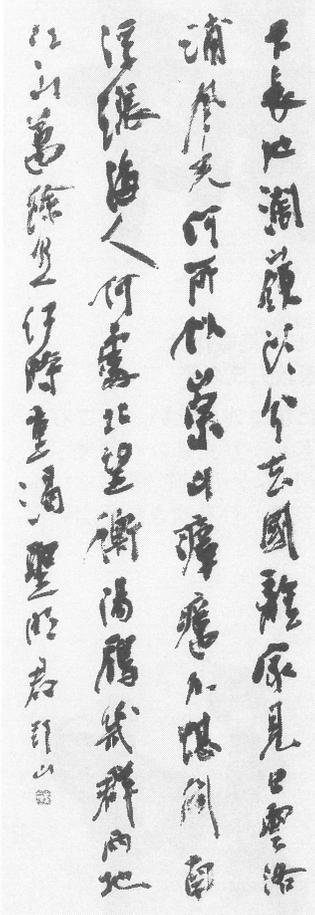
結婚して四十年に近い。妻は幼な子と戯れるおばあさんであり、我が白頭は更に薄くなるうとして。詩経の「借に老ゆ」の通りであると感じている。

この作品は「借老」の二字書としたが、表現のねらいには「老」はない。格調高く、生動する作品を目指している。

評論家小野寺啓治氏の評語

「借老」の句意とは真逆の表現で、意気盛んに訴える。筆の腹から穂先を動かす活力で線が堂々とし、行草に構えた流れに乗って迫力が増す。紙面に対する字粒は抑えても線が見せる勢い猛が輝く。

二〇一〇年 第35回埼玉書道三十人展 沈佳期詩



225×80

小野寺啓治氏評語

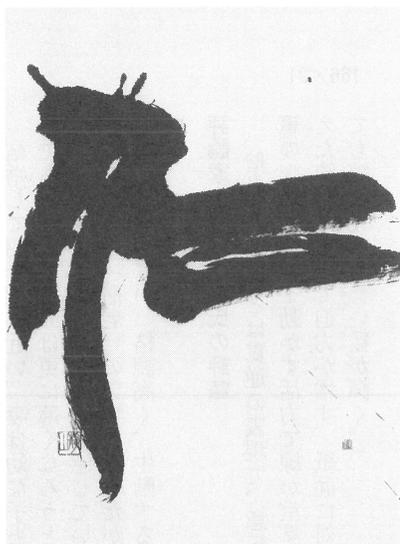
市澤静山の草書四行書「沈佳期詩」は、第35回埼玉書道三十人展に出品された二点のうちの一点で、静山の過去に見ない新たなジャンルの仕事であり、しつとりと一字ずつに余裕の楽しさが光る。文字ごとに大きさや太さ、リズムを変える歩み方が、遊び心の豊かさを十二分に発揮する。一つの書風に拘束されず、新鮮な書風を編み出す姿勢に感嘆する。



帰去来 70×170

『中央公論』2013年12月号 巻頭グラビア掲載作品
読売新聞論説委員・書道評論家 菅原教夫氏の評

企みや目的があってはいけない。むしろ自然に筆を運びたい。日ごろのこうした想いを実現した行草大字には、師風はもとより北魏の石刻文字や唐の太宗、會津八一らの書風が渾然とした力強い世界が広がる。「帰りなんいざ」。東晋の大詩人による有名句に、現代の不安な心性を吹き払う潔い響きが宿った。



2012年 仁 90×67

動きの中のかたち
—日本の書 市澤静山展—
アルゼンチン展



166×91

二〇一五年 改組新第2回日展



駒挫 93×168

二〇一五年 第32回読売書法展



坐馳 70×168

二〇一七年

上條信山の門流—書象会選抜展
於 奈良杉岡華邨書道美術館



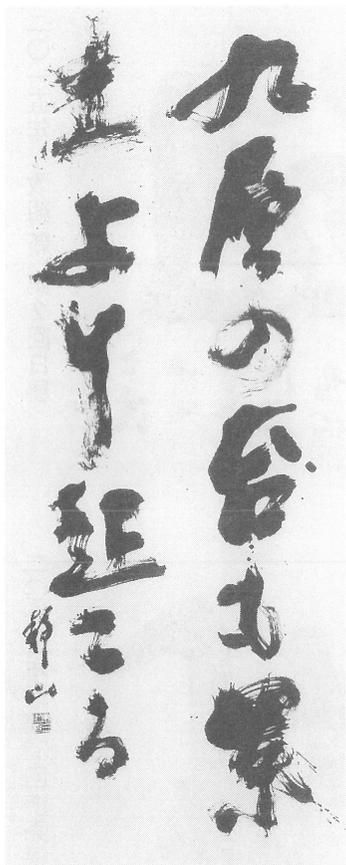
書譜一節 70×168

二〇一八年 改組新 第5回日展



帰馬 168×93

二〇一九年 第36回読売書法展



九層の台 170×70

二〇一九年 第36回読売書法展



徳有報 70×170